

# 跡見玉枝考

## はじめに

跡見花蹊の従妹である跡見玉枝は桜の絵を得意とした画家である。玉枝の作品と事蹟は平成十六年度の本学跡見花蹊記念資料館主催第三回企画展<sup>(1)</sup>において紹介され、その成果を受けて先の拙稿では跡見花蹊との関わりを中心に考察を試みた<sup>(2)</sup>。引き続き玉枝の年譜考証をさらに進めることを期し、そのための一助として本稿では前稿でふれえなかつた内外の諸資料を紹介し、生涯の一端に光をあてることにしたい。

## 一、玉枝の回顧から

玉枝自身の生涯を知る資料として現在確認できる書物は、『桜の我が世』(昭和六年)<sup>(3)</sup>と『さくらの木蔭』(昭和十六年)<sup>(4)</sup>である(図1)。前稿でもふれたとおり、前者は企画展の基礎資料とされた門下生井上波南子による師の口述筆記を中心とするものであり、その十年後に出された後者には玉枝

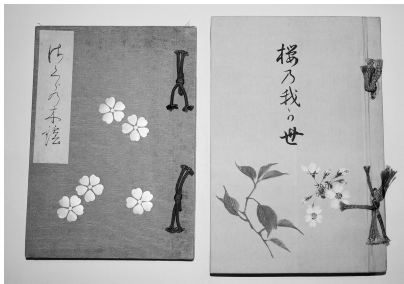


図1 『桜の我が世』(右)と『さくらの木蔭』(左)

植田恭代

自身のことばによる回想が掲載されている。二冊ともに玉枝の絵画作品を掲載し、題名には「桜」が掲げられ、桜の画家として生きた生涯を玉枝の側から伝える貴重な資料である。

先に出された『桜の我が世』には、桜とともにある晩年の玉枝の思いがしたためられた自筆の文章が載せられている。自身による半生の回顧の趣きが感じられる文章の全文は、次のとおりである。

わが日の本の花としいへばやがて桜とう

べなはるゝこそむべなれ 皇国の花こゝろ

の花ともいひつべきか 朝日ににほふ山

さくらとよまれしはいはむも更なり 春の

夜は桜にふけて終ひけりといひ花

草朶いつかな日かげゆるがさるともい

へる 或は秋色桜のことき人がらしの

ばする君もありて花見のたのしさ床し

さ さて東の間に散りゆく風情

総じて花は一重と八重いろは白と緋

とき浅黄うす紫など 一重にも

彼岸さくらの早咲きあり 八重にもを

そさきありてともにめでたし おのれ幼き

頃より花をたづねては写し、もの其数

四百種余り 花の道場こそ己が生涯なれ

その間忝なくも賢きあたりより召されてさ

げしことも幾度身に餘るよろこびも花

のたまものに外ならず この頃古き教

子たち打寄りておのが書今のよのさ

ま書きつゞり摺巻として世の大方の人に

綴ちてはといふ 殊更に述ふべきこと、

てもなければ老の身のその情にほだ

されて此書をつゞること、しつ この書

はいづれも桜の絵の折この日誌を基

とせし その散り失せしも多く又大方は

震災災に焼けうせつ はづかに残

れるを取りあつめつるなれど幸に

おのがめづる花にさきて思ひ出草と

もなりなばよろこばしかるべきとてなむ

春ならぬ時もさくらを友として

こゝろのとかに世をへすか有

昭和五年晩春

七十三編

玉枝

しるす

この自筆による文章は、当該書の前半を占める作品の写真と後半の口述筆記の間にあり、我が生涯を語る口述筆記部分の序という体裁を成している。ここには、七十三歳の玉枝自身によって顧みられた生涯が端的に表されている。それは、桜とともに歩んだ半生である。さいごに、震災によって貴重な絵も日誌も消失したこと、わずかに残ったものを取り集めて思い出のよすがにすること、「桜の我が世」にまとめたという事情が記され、末尾に桜とともに心穏やかにある境地を詠む和歌をおいて結ぶ。

「わが日の本の花」と始まり「皇国の花こゝろの花」と表現され、冒頭から皇国の桜の印象を与えるのは、時代の保守的な思想の反映とすべきであろう。玉枝は江戸時代末期から明治・大正・昭和を生きた人である。好んで描いた桜にも、時代の影は切り離せない。桜研究の古典的名著として現在も顧みられる三好学『桜』や山田孝雄『桜史』<sup>6</sup>は、昭和十年代に相次いで出されたものであり、植物学者であれ、国文学者であれ、桜への興味には時代の趨勢が関わっている。玉枝の文章は昭和五年にしたためられており、これらの著書に十年ほど遡るが、ここで選ばれることばも、昭和十年代に至る途上にある。

続く「朝日にほふ山さくら」という一節は、本居宣長の詠歌による。

おのかかたを書てかきつけたる歌

敷しまの倭こゝろを人とはは朝日にほふ山さくら花

『石上稿』「詠稿十六」寛政二年庚戌詠<sup>7</sup>

「敷しま」は「大和」にかかる枕詞、一首は倭の心はどのようなものかと人が訊ねたら朝日に美しく咲く山桜の花のようなものと答える、という歌意である。『石上稿』は宣長の和歌を年代順に収めた歌集で、これは寛政二年（二七九〇）、宣長六十一歳の詠歌である。『鈴屋集』には入集していないこの和歌は宣長自身が好んだという<sup>8</sup>。類歌の宣長詠もある。

桜の花の梢に朝日のかた

岩戸出でし朝日にほふ山さくらさもおもしろき花ざかりかな

『鈴屋集』一五八三<sup>9</sup>

八代集にはみられない「朝日にほふ」という一句は、宣長の別の詠歌も得て、人口に膾炙した。

『桜史』には「朝日に匂ふ山桜花」と題する章があり、そこでは次のように述べられている。

わが国と桜とは形の影に於ける如きものなり。わが皇国の学をなさむもの誰か桜を忘るべき。近世国学の勃興は、国歌の隆運に赴きし結果とも見ゆるが、その頃より桜に関する研究の著しく興れること亦偶然にあらざるべし。

国と桜とは「形」とその「影」の關係にある、とする。国花としての桜であり、国学思想が昭和という時代に引き寄せて再評価

される。続く部分では桜と国学の関わりに言及し、国学者であり歌人でもある賀茂真淵の詠歌にその源流をみる。いま、その二首をあげてみる。

うら／＼とのどけき春の心よりにほひ出でたる山ざくら花

もろこしの人に見せばやみよしののよし野の山の山ざくら花

二首ともに、和歌のみをみるかぎりでは、のどかな春の美しい山桜を詠んだものである。

しかし、『桜史』は「その桜を春の心より生れたりとし、山桜を大和心の象徴とせる思想」と述べ、この思想を「一層發揮」したのが本居宣長であると位置づけていく。吉野の水分神に祈って授かった子である宣長は「ある意にて桜の化身といふべきなり」とし、吉野の花見の紀行文『菅笠日記』や、詠歌「吉野百首」「枕の山」「桜花三百首」をあげ、宣長の生涯と桜の関わりの深さを述べている。

玉枝が自身の生涯を顧みる文章にさりげなく「朝日ににほふ山ざくら」という表現が入り込んでくるのは、こうした国学者たちと桜の流れを汲んでいる。遡れば、少女時代から上京時に世話になった従姉の花躰や一族の知友、跡見学校の教員にも国学者は多い。桜の画家である玉枝の心に生涯の師として刻まれる宮崎玉緒も、国学者のひとりである。ただし、国学の思想として受け止め

るといふより、それを重んじた時代の感覚を表すとみるべきであろう。

玉枝は皇室との縁も深い。前掲文章中の「賢きあたりより召されてさ、げしことも幾度身に餘るよるこびも」とあるのは、度々宮中から揮毫をもとめられたことをさしている<sup>10</sup>。実際、その作品は現在でも三の丸尚蔵館に所蔵され、平成二十一年春の企画展には玉枝の桜図屏風が展示された<sup>11</sup>。そうした事蹟からのごく自然な表現としてあるのが、「朝日ににほふ山ざくら」と考えられる。

しかし、玉枝は時代のなかの保守的な思想の継承者にとどまるわけではない。前掲の文章の中心を成すのは、さまざまな桜への興味であり、幼少時から桜を訪ねて写生したものは四百種余りにのぼる。皇室からのもとも「花のたまものに外ならず」と、桜ゆえとする。父の理解と師に恵まれて精力的に活動をし、さまざまな事蹟を残したひとりの女性の生きざまがある。

## 二、海外との交流

玉枝の生涯を外側から伝える一資料をみてみたい。

昭和十八年八月九日の『読売報知』紙面は「跡見玉枝女史 閨秀画家」として玉枝の訃報を掲載する。新聞編集の立場から簡略に記される文章は、広く一般大衆にその人の生涯を凝縮して伝える文章である。ここでは、芝区の自宅で七日に逝去（八十六歳）

数え歳)したことを伝えるあとに、次のような生涯が記されている。

女史は故花蹊女史の従妹に当り、特に桜花を得意とし、明治卅年私塾「精華会」を開き、同卅七年渡米、帰国後同四十二年富美宮、泰宮両殿下の御用掛を拜命、昭和八年から畏き辺りの御用命により御苑の桜写生の光榮に浴し両度にわたり皇陛下に画帖を献上申し上げてゐる、本春は照宮殿下御用命の桜の大幅三帖を描写これが絶筆である

これは、この時点で第三者の目からとらえられた玉枝の生涯である。紙面が提供する情報は、花蹊の従妹であること、桜の絵を得意とした画家であること、私塾「精華会」の主宰、渡米、そして帰国後の事蹟として皇室からのもじめに依りて御用掛をつとめ、以来、御苑の桜写生や画帖献上、皇室関係の揮毫を伝える。皇室関係の事蹟の数々は前稿でもふれたとおりであるが、それが訃報の紹介文の大半を占めるのは、やはりこれが昭和十八年八月の記事であることも関わっている。この記事の掲載される当該紙面は、「熱汗と戦ふ奉戴日」「絹物の点数引上げ 反物は丈を短縮あすから衣料決戦体制」「戦ふ南と北 昼は戦闘 夜は開墾」などの見出しとその様子を伝える写真で埋まり、その戦時色濃い紙面の下欄に玉枝の訃報が載せられている。そうした目でながめると、当時の社会情勢のなかで、生涯を端的に伝える紹介文に短いながらも「渡米」の記述が入ってくることは注目される。『朝日新聞』

八日付紙面の訃報はふれないが、玉枝の海外交流を報じてきた『読売新聞』は渡米を生涯の特筆されるべき事蹟とみなす。『桜の我が世』には、米国滞在中に「焼絵」を学び帰国後は塾生たちに教え、その道具を東宮に献上したことが記されている。その焼絵の道具が評判であるという記事は『読売新聞』紙面(明治三十八年十二月十四日)にも掲載されている。玉枝は明治三十年代に国外に出て異文化にふれ、海外の絵画技術を日本に伝えた。玉枝の生涯を伝える資料には、渡米の他にも、しばしば海外との交流が散見する。早く、フランス人のジュリー夫人に水彩画を二年ほど習い、明治十九年には京都でフェノロサの講演を聴いている<sup>12)</sup>。また、明治二十八年三月には、米国の海軍将校夫人ミセス・シブソンが桜の絵を玉枝に学び、同じ館に住む夫人たちがそれを羨ましがり四五人になったことを伝える。また、大正年間には皇族を通じて玉枝の作品が海を渡ることもあり、大正九年には東久邇宮の渡欧土産の花鳥の幅を揮毫し大正十二年三月にはフランス留学中の朝香宮が同国の貴族に贈る土産の扇面を玉枝が揮毫している<sup>14)</sup>。渡欧する皇族を介し、絵画を通じて玉枝は日本文化を海外に紹介する。

時代のなかで桜を描く玉枝は、一方で開かれた世界への興味を抱く時代の動向を体現するように活動し、それが、玉枝の生涯で見逃せない事蹟として昭和十八年八月の時点で、第三者によって顧みられているのである。

### 三、玉緒・玉枝師弟の桜

前掲の文章に戻ると、幼い日から桜を愛でていたことが記され、七十三歳のこの時、桜の生涯と顧みられていた。さまざまな桜の品種に言及され、一重と八重の形状、白や緋をはじめとするさまざまな色合い、開花時期にふれ、四百種余りの写生には、玉枝の博物学的な興味がうかがえる。写実的な描法はおのずと品種への興味に結びつくものであるが、玉枝の興味は和歌を師事し、桜の師でもある宮崎玉緒によるところが大きい。ここで、師弟の桜についてふれておきたい。

画家としての玉枝の絵画は、美術史から眺めれば桜画の系譜に連なる。前稿で見たように、近世に桜の絵を好んで描いた桜画の画家たちがおり、他の事物と組み合わせず桜だけを描く絵画はその作品は桜画と呼ばれ、三熊思孝すなわち花顛、その妹露香、広瀬花隠、織田瑟々がおり、その瑟々に玉緒が師事している。博物学的に桜を調べ愛した三熊思孝を始祖とするこれら「桜画」の画家の系譜を検証した今橋理子氏は「三熊派」と呼び、織田瑟々の他界とともに途絶えたとする。<sup>(15)</sup>今橋氏の三熊派のなかに宮崎玉緒や玉枝は入れられていないが、その系譜にあることは『桜史』にもふれられており、「桜戸玉緒」の章には瑟々に玉緒が師事したと、玉緒の門人として玉枝がいることが記されている。また、『桜

の我が世』の三好学による序文でも、「予は、安永、天明の昔に於ける花顛、露香の桜画の描法の系統が、桜戸翁を経て玉枝先生により今日に伝はるを喜び、先生の益寿康にして丹青に従事せられ、以て国花の美性の顕彰に努められんことを祈るのみ。」と結ぶ。これは、桜画の系譜にあり、その継承者としての玉枝に寄せる讃辭の序と理解される。

ただし、師弟の桜は「桜画」の定義に当てはまるものばかりではない。今橋氏は三熊思孝に始まる桜画の画家たちの特徴として桜のみを描くことをあげられ、玉緒や玉枝の場合も写実を基本としその流れを汲むが、『桜の我が世』『さくらの木蔭』掲載の作品には、桜が他の景物と組み合わせられた作品もある。『桜の我が世』の序文に続く色刷りの「日出桜」と題する作品は、桜の花と下半分の斜めに幹という構図に三羽の鳥が描かれている(図2)。花蹊の書画をはさんで掲載される「古宮崎玉緒先生筆」とある「山桜里桜及富士山図」はその名のとおり富士山を背景にした桜である(図3)。また、『さくらの木蔭』掲載の「左近桜」は、桜の下に水鳥が遊ぶ。玉緒・玉枝師弟の作品については、絵画の描法や技法の面から別途、詳細な検討をする必要があるが、いま、両書の頁をめくるだけでも、桜画の系譜を受け継ぎながら、独自の描法の一端もあることがうかがえよう。

また、三熊思孝や露香、広瀬花隠に三十六の花の品種を選んで描く桜画帖があり、今橋氏はそれが和歌の三十六歌仙にあやかつ

た「三十六花仙」であることを指摘され、三熊派のひとつの十八番であるとする。そうした目で玉緒・玉枝の作品をながめると、現段階で管見に入ったかぎりでは、玉緒と玉枝に三十六の発想は感じられない。玉緒はそもそも玉枝の和歌の師であり、詠歌に冠せられる数字の単位は百である。「桜の我が世」の末尾には「恩師の霊を慰めます」として、種々の桜に寄せて百首の和歌を詠じた「桜戸玉緒詠」の「桜品詠百首」が収められる。これは「山桜」に始まり、さまざまな桜の名をあげてそれを詠み込んだ和歌を一首ずつ掲載するもので、百首のさいごは「玉緒桜」である。古来から多数の詩歌を作る形式があり、百首歌は伝統的な形式であるが、百首詠の背景には、前述した宣長の「吉野百首」「桜花三百首」や、『桜史』にあげられる文政の幕府の医官池原以文「桜花五百詠」の試みなどの影響があろう。

玉枝は桜の研究者でもある。それも師の玉緒によるものらしく、



図2「日出桜 小金井名所」

『桜史』には「玉緒は又桜の研究に熱中し、京都奈良吉野の桜花の愛すべく重んずべきを世人に知らしめき。玉緒はただに桜花を愛し、これを研究するのもしならず、これが真を写して世に伝へらむことを謀りき」とする。研究に熱中することから、世にしらしめるために写生をしたという説明のしかたである。玉枝の桜への博物学的興味は、こうした玉緒の関心を受け継いでいる。「桜の我が世」「学門と桜花の研究」には「私は、此の師の膝下で桜の研究をこゝろざしました」とある。

『読売新聞』明治二十六年四月十日の記事には、玉枝の桜に関する記述を掲載する。少々長いが全文を引用してみよう。

○さくら(其五) 此程来記し続けたるさくらの調べは都の淑女と知られたる桜戸玉枝女史(跡見玉枝女史の事なり)の多年に調べし所なり女史は京都の人幼少より画を好みて宮崎玉緒子の門に遊び縦横筆を試みむとされしに家嚴之を戒めて



図3「故宮崎玉緒先生 山桜及富士山図」

曰へらく女史の筆素より万能を期すべからず寧ろ一種を撰びて其の粹を得るには如かずと女史喜んで私に以為く専門の画其類少きにあらざれど妾が最も愛するは只桜のみ武士の日本心にも手弱女のやさしき姿にも比べてゆかしきは此花なり妾は今より桜かきたらんと遂に心を此に傾けて手から三百余種の桜を写し業成て師名を桜戸玉枝と賜ふ後望月玉泉子を師とし桜を全国に尋ねて其名愈々知らる今女史が名花に詠ぜし所を拾ひて下に記し以てさくらの終りとす

音羽山桜

おこたりの時あらひ衣春毎に山の桜は待遠き

哉

幸桜

色深くとめる桜の花見ては幸はに神の裏しら

なむ

八重常磐桜

色かへぬ松に倣ひて咲にけり春を常磐の八重

桜哉

貫之桜

今はなほ翳す桜の花かつら雪さむからぬ春の

林に

生駒山桜

分入らむ花の雪ちる生駒山心の駒のゆくに任

せて

雲井桜

振分て雲井桜の花見れば連なる星の心ちこそ

すれ

鹿兒島桜

狩衣のこき紅のしたかさね輝ゆき色は桜な

り皷

八重有明桜

影消し月の形身の名にめでて有明桜重ねては

見る

単撫子桜

たらちねのおやに替て生立し撫子桜笑み初に

けり

三輪山桜

堀据糸を三輪山桜咲めらし松の木の間に懸る

白雲

旭桜

旭影匂ふ桜の色にこそ日本心はそむへかりけ

れ

寢覚桜

貪眠き窓の諫に植て見む名さへ寢覚の花のひ

と本

朧桜

立かくす霞の送り花見れば朧月夜の心地こそ

すれ

大手鞠桜

隠れりと見ゆる桜の大手鞠枝も撓に花さきに

けり

明石桜

月とのみ誰か云けむ朗々と花に明石の春も思

はで

暁桜

乱れ髪とく起て見むさし櫛のあかつき桜今盛

なり

玉尾桜

春毎にのふる命の玉の緒を面影にさへ見る桜

かな

黄金桜

浮事もしらで桜は世の人の嘆にかふる黄金な

り皷



芝山桜

萌渡る芝山桜咲く頃は筵ひかても見るべかり  
けり

小鹽山桜

春の日をまた長岡と思ひしにちるは小鹽の山  
桜哉

帆立桜

春の野の霞の海に掛とめて白帆と見しも桜成  
けり

八重玉桜

麗々とにほふ日影の玉桜はるの光を重ねてそ  
見る

伊勢桜

天照す髪の御影にあいぬらむ其いせ桜色濃か  
り晃

御室桜

人は酔御室桜のさく見れば老木も春は若返る  
らむ

嵐山桜

散をこそ見るべかりけれ世の中の春の嵐の山  
桜花

鹿の子桜

処女子かくれなひ匂ふ袖垣に鹿の子桜の花咲  
にけり

須磨桜

きのふまで眺し波の花ならむ匂ふ桜のすまの  
浦風

男山桜

雨花これも盛りの男山世に惜まれて散らば散  
ら南

玉箒桜

春の野に匂へるはなの玉箒心の塵を払へとや  
さく

鈴鹿山桜

春雨の今日も降ずば鈴鹿山心は花に留て見ま  
しを

糸括桜

長かれと思ふ桜の糸括さりとて散ぬ物ならね  
ども

八重遅桜

夏もまた重ねて匂ふ山桜遅れし人も春を見よ  
とや

漣桜

見渡し霞の海のなぎさより漣桜さきいでに  
けり

手向山桜

取敢ず秋は紅葉の手向け山春は桜をぬさにか  
へまし

当該紙に連載された桜の最終記事で、長年の玉枝の調査にもと  
づくことが記される。ここでは、玉枝の調べた桜を三百首余りと  
し、『桜の我が世』に京都博物館の委嘱で正倉院御物をともに写生  
したとある望月玉泉を師として、のちに桜を全国に尋ねたという。  
これらが現在の品種名とどのように対応するのか、植物学方面か  
らの検証が必要であるが、ここに並ぶさまざまな桜の名は、地名  
に由来するものもあり、その命名は文芸的な印象も強い<sup>16</sup>。多種に  
わたる桜の調査にも文芸的な趣きの漂うところに、玉緒から玉枝  
に受け継がれる桜が和歌の教養ともにあることをうかがえよう。  
新聞の記述では「其名愈々知らる今女史が名花に詠ぜし所を拾  
ひて下に記し」とするが、実は、「明石桜」以外の歌は『桜の我が

世」所収の玉緒詠「桜品詠百首」のなかの和歌である。語句の一部や漢字の表記は違うが、桜の名をあげて下に和歌を掲げるそのスタイルも師の詠歌そのままに掲載されている。このような混同が生じるほど、師の玉緒と玉枝の絆は強いということに他なるまい。

今回とりあげたのはささやかな資料にすぎないが、それぞれの照らし出す玉枝の側面は興味深い。桜に生きた玉枝の生涯に内外から光を当てる時、時代のなかになりながら敬愛する師のもとで独自の世界をひらいていく、ひとりの女性画家のあゆみが浮かび上がってくる。

注

- (1) 企画展の図録『Yokushi—桜の画家 跡見玉枝展』(跡見学園女子大学花陰記念資料館、平成十六年)に作品が掲載され、渡辺泉「桜の我が世」にみる跡見玉枝」がある。
- (2) 拙稿「跡見花陰と跡見玉枝」『跡見学園女子大学文学部紀要』(平成二十一年九月)。なお、前稿の「近江八幡」(東近江市)は、現在も「近江八幡市」である。誤りをお詫びして訂正する。
- (3) 「桜の我が世」(昭和六年 跡見家)。
- (4) 跡見玉枝『さくらの木蔭』(跡見精華会 昭和十六年)。
- (5) 三好学『桜』(昭和十三年 富山房)。
- (6) 山田孝雄『桜史』(桜書房 昭和十六年)。のちに講談社学術文庫『桜史』(講談社 一九九〇年)。

(7) 『本居宣長全集』第十五卷(筑摩書房 昭和四十四年)。

(8) 注(7) 文献の大久保正「解題」。

(9) 引用は『新編国歌大観』(角川書店)による。

(10) 注(2) 拙稿参照。

(11) 平成二十一年三月二十八日ー六月十四日の第一期に跡見玉枝「桜図屏風」二曲一雙(昭和七年)が展示された。図録『国の花 華やぐ』(宮内庁三の丸尚蔵館)掲載。

(12) 注(3) 「桜の我が世」による。

(13) 『読売新聞』明治二十八年三月十日。

(14) 『読売新聞』大正九年二月二十日、同十二年三月二十一日。

(15) 今橋理子「花惜しむ人——桜狂の譜・二熊派」『江戸絵画と文学』(描写)と(ことば)の江戸文化史』(東京大学出版会 一九九九年)。

(16) ここにあげられていない桜名をあげておく。

山桜、車邊桜、芳野山桜、薄花桜、單玉桜、小町桜、九重桜、單常磐桜、殿桜、八重撫子桜、白桜、水分桜、御膳桜、初瀬山桜、單遅桜、雪山桜、名鳥桜、由布桜、胡蝶桜、黄金桜、月輪桜、和歌浦桜、小枝垂桜、大枝垂桜、長柄山桜、夕錦桜、突羽根桜、御阪桜、翁桜、二荒山桜、高円山桜、單有明桜、栄手桜、大内山桜、平手桜、小手鞠桜、樺桜、奈良桜、御階桜、艶桜、大江戸桜、小江戸桜、浅黄桜、小桜、寿桜、衣笠桜、鹽釜桜、菊桜、春駒桜、姥枝垂桜、手弱桜、小金井桜、牙桜、旗桜、真里桜、単姥桜、八重姥桜、鹿兒桜、尾上桜、八重枝垂桜、檜扇桜、緋桜、真桜、富士山桜、香桜、少女桜、乳兒桜、爪紅桜、立田山桜、それぞれの下に和歌を掲げる体裁も同様である。

※表記は原則として差しつかえない限り旧字を新字に改めた。